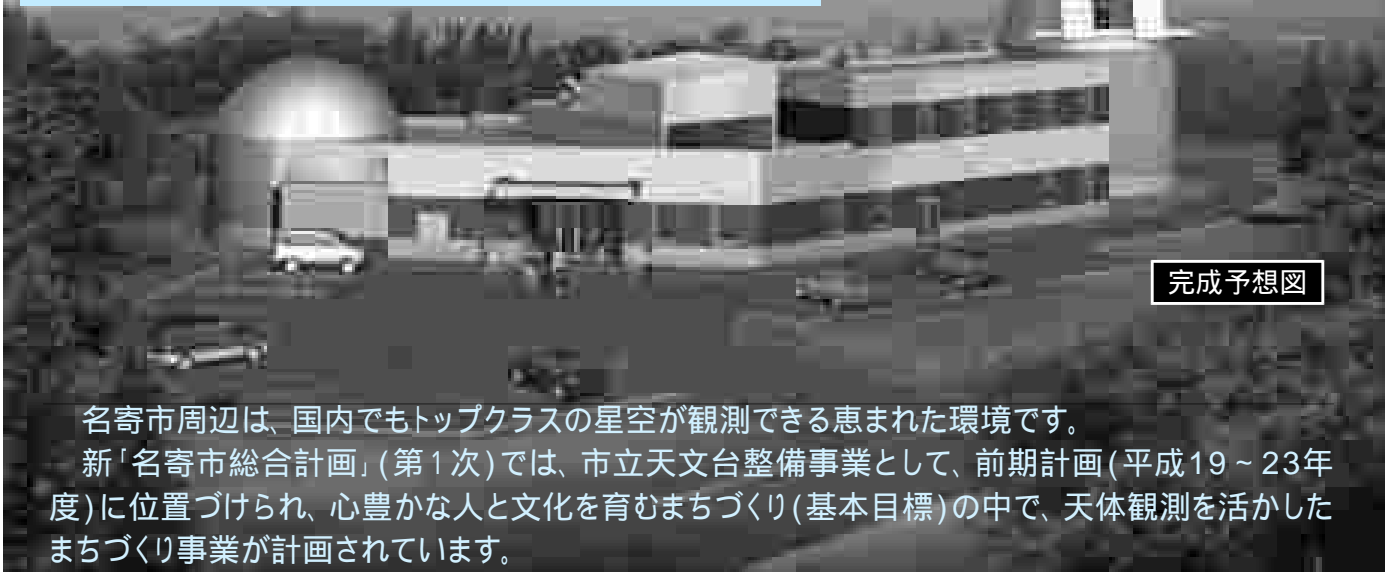


新天文台が 平成22年度開館予定



完成予想図

名寄市周辺は、国内でもトップクラスの星空が観測できる恵まれた環境です。

新「名寄市総合計画」(第1次)では、市立天文台整備事業として、前期計画(平成19~23年度)に位置づけられ、心豊かな人と文化を育むまちづくり(基本目標)の中で、天体観測を活かしたまちづくり事業が計画されています。

すでに基本設計、実施設計を終え、日進地区にある道立広域公園サンピラーパーク内「星見の丘」に平成20年度工事着工、平成22年度には開館が予定される新天文台の概要についてお知らせします。

全国でも屈指の観測条件と 積み重ねてきた歴史

美しい天文現象に魅せられた木原秀雄故人(さん)。

昭和23年の礼文島での金環日食を自作した15センチ望遠鏡で観測。金環日食のすべてを記録した写真は学術的にも貴重なもので、東京の科学博物館に15年間もの間展示されました。

「多くの人に宇宙の広さや、神秘を味わってもらいたい。そして宇宙のロマンにふれて欲しい。」と名寄高等学校の教員だった木原さんは、退職を機に、昭和48年12月、東2条北5丁目の自宅隣に『私設木原天文台』を開設しました。

自費で口径25センチの反射望遠鏡を設置した当時道内初で最北の私設天文台でした。

昼間は標準観測者として黒点観測



天文台を開放する木原さん

に当たる一方、夜間には施設を無料開放しました。これらの活動が契機となり、昭和51年には「名寄天文台愛好会」が発足。

その活動は昭和62年に設立された「天斗夢視(てんとむし)」へと引き継がれました。

その後、名寄市は平成4年に天文台の寄贈を受け、9月には『市立木原天文台』としてオープン。澄みきつた名寄の夜空を全国に情報発信しています。

北海道大学との協定

天文観測施設がない北海道大学では、交通の便、観測条件、観測技術者などの面で名寄市を重視、平成17年12月には地域間の交流促進および施設・機器等の相互利用を図るために相互協力協定を締結しています。

これまでも天体観測で協力関係にあり、同大学による光ファイバー敷設により、大学と木原天文台が直結したことで高速データ通信が可能となり、大学から天文台の望遠鏡を遠隔操作し観測することが可能となりました。

協定による相互協力事項は、大学院生の宇宙観測やデータの活用をはじめ、地域振興に関することなどが盛り込まれています。



北海道大学と相互協力協定



現在の市立木原天文台



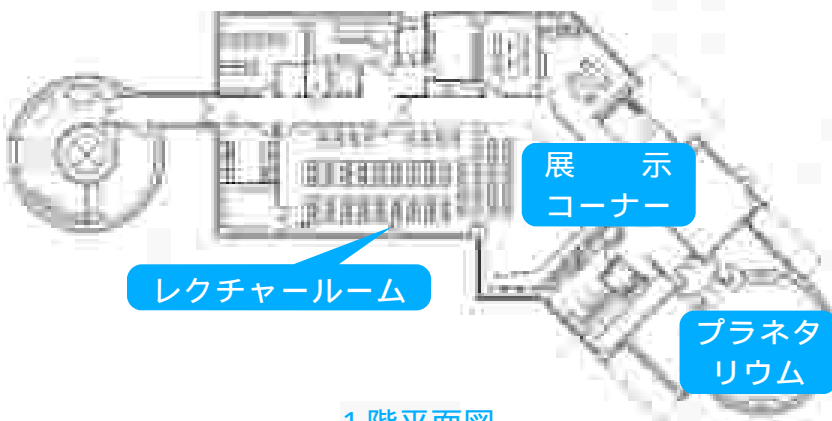
北海道大学と連携した 新天文台の整備概要

新たな天文台は、鉄筋コンクリート一部2階建てで、天体観測やプラネタリウムスペースなどの施設整備を市が行います。すでに実施設計などを終え、市全体の事業費は8億5千500万円を予定しております。

また、整備計画では、口径1・4メートル規模の望遠鏡を北海道大学が用意することになっております。施設整備の目標としては、天文台特有のドーム形を有効に生かし、市内から一目で分かる市民のシンボルとなる施設を目指します。「星・雪・きらめき・緑の里なよろ」のキャッチフレーズを生かし、星のみならず、降雪地、森林地の季節を感じる施設とします。児童・高齢者の多様なニーズに応えるべく、多機能なプラネタリウム投影、屋上スペースを生かした体験学習、周辺の自然環境に配慮した施設とします。

また、機能面では

- ・多機能なプラネタリウム
- ・最先端のデジタルプラネタリウム機器を導入し、バーチャル宇宙体験ができる施設を目指します。また、従来の投影時間が限定されたものではなく、オート番組の投影を実施することで利用しやすいシステムとします。
- ・体験を通して楽しく学ぶ展示室、常設展示には木原さんの足跡や、



1階平面図

天体写真など、リアルタイムな天体現象を大型ディスプレイで楽しむことができます。

- ・その他レクチャールームなどを利用した企画展示が可能になります。
- ・学校および生涯学習

レクチャールームは団体利用による事前説明会、学校のカリキュラムに合わせてクラス単位での天文授業に対応できるほか、星と音楽による



2階平面図

コンサートなど、新たな企画実施が可能になります。

- ・新天文台とまちづくり

教育・研究・観光などのあらゆる分野で天体観測を生かした特色あるまちづくりを目指しております。

特に、低緯度オーロラの出現はインターネットを通じて全国に情報発信できるものと期待されます。